

全道展機関紙“ZEN”第3号 昭和54年10月15日発行
 発行所 全道美術協会 事務局 札幌市西区発寒4条5丁目434-8
 竹内 豊方 T 011 (851) 9141 内 232 (夜間・休日) 661-0673
 印刷 中西印刷株式会社 011 (781) 7501
 編集委員 嵐 玲子 岸本 裕躬 斎藤 洪人
 坂口 清一 伏木田光夫 山口 惣市

ZEN

全道展機関紙

NO. 3

公募展も二十回、三十回と回を重ねると自
 から会の滞滞や会の中心勢力(会の中核を成
 す作画傾向)にも低回が目立ってきて、会
 の生彩を欠いてくるのは地方、中央を問わず公
 募団体の宿命でもあるようだ。
 会の内部に新旧の交代があるのは勿論だ
 が、中心勢力が次第に移り変わってゆくことは
 寂しいことだし、これが団体展の宿命である
 としても、中央画壇でも画家を個人個人とし
 てみるならばかつてある時期団体展の中心的
 役割をはたし、現在も確かに立派な仕事を続
 けている信頼できる作家も相当数あることを
 思えば、勉強の張り合いも自から湧き出てく
 ると思う。
 それは常に団体個人主義を捨てて広く地域
 社会の美的教養を高め、各自に自分を掘り下
 げてゆく以外にないと思う。
 さて第三十四回全道展も会場の壁面確保の
 関係から、近年とみにエスカレートする大作
 傾向を避けて、会友、一般出品者には六十号
 以下の作品を一点添えて出品して貰うことと



したが、これは同程度の力の作品であれば小
 さい方の作品を陳べ、できるだけ壁面に余裕
 を持たせようという苦肉の策であって、決し
 て制作意欲を抑圧するものではない。
 しかし結果的には必ずしも小さい作品の方
 が良いという訳にはいかず、大作の方を陳べ
 られた作家も少くない。このことは会員の審
 査が厳しく、良い作品は良いとし、意識的に
 小さい作品を取ろうというような姑息な考え
 は自然に忘れられていたという良い結果が出
 たと思う。
 また今年の審査をはじめ前に昨年実施し
 た絵画、版画、彫刻、工芸の各部門別審査の
 可否についても活発に論議を交して今年も部
 門別に審査を行った。全道展も発足当初は僅
 か十数名の各部会員によって結成されたの
 で、三十年余を全会員によって各部の全作品
 を全会員によって審査を行ってきたが、今日
 では各部門の会員も増えてきたし、時間の関
 係からも部門別に分かれて審査を行った方が
 能率的でもあると思う。全作品を全会員によ
 って審査を行うことは今までの全道展の一つ
 の特色ではあったが、専門的な分野の勉強も
 なかなか難しい問題が残るし、従来通り全員
 で審査をという声も相当あったが今年も部門
 別審査に落ち着いた。
 ただし授賞の段階では従来通り各部が候補
 作品を上げて全員の協議で行われた。加えて
 審査員の座席を抽選で決めるなどというのも
 初めての試みとして参考になろう。
 道展主催の〈高校美術展〉も無くなって、
 道新と共催の〈学生(高校・大学)美術全道
 展〉も定着し、本展とのつながりも深まっ
 てきたことも注目されよう。
 今年の第三十四回展はかなりの厳選となっ
 て会場は幾分見易くなったが、全体として会
 の生彩を欠いていたような気がするのには私だ
 けの感想であれば幸である。さらに今回上位
 の賞が中央に住む道出身者で占められたこと
 も、道内出品者の奮起を促し、一つの刺激と
 なったに違いない。

事務局通信

第34回全道展報告

〈搬入〉搬入点数、油絵八八二、水彩三六、
 版画一七九、彫刻二〇〇、工芸一四五、計一
 三六二点、三三回展に比べて油絵の増加が目
 立ち、工芸も若干増加した。従来ともすれば
 必要以上な大作が出品され、このため会場の
 狭隘さを増していたが、小さくとも質のよい
 ものをより多く入選させたということから、
 今回から、絵画部門の出品は出品作品の
 うち一点は必ず六〇号以下であることと改正
 された。

〈審査〉三三回展から、絵画、版画、彫刻、
 工芸各部門別に審査、授賞作品については全
 会員で審査決定した。また審査の慎重を期す
 ため、一次審査では入落を決めず、落選と
 保留作品にわけ、二次審査で入選作品を選定
 する方法をとった。絵画部門でいえば、情実
 を排し、また佳作を落選させるようなこと
 がないような二次審査を終えるのに九二日間を
 要した。

入選点数は、油絵九八、水彩一、版画二〇、
 彫刻三六、工芸三四、計一八九点であった。

〈会場〉(陳列)例年画的に百号大の作
 品が二段掛けで、目白押しにならぶ状況であ
 ったが、今回は六〇号以下の入選作品が三〇
 %を占めたため、全作品一段掛けとなった。
 これは会場時代を通じ二〇年来なかつたこ
 とでスッキリした会場となった。ただ工芸部
 門は狭隘な感があったことは申訳ないが、限
 られた会場面積からいたしかたないことであ
 る。来年からは立体作品は六〇×六〇×一五
 〇以内、重量一〇〇kg以内。壁面使用作品
 は一〇〇号以内に制限せざるを得ないことに
 決った。

〈会期〉昨年(六月開催)に比べて入場者
 は大巾に増加した。これは夏休み時期の八月
 であったことも幸いしているかもしれない。
 来年の会期については未決定であるが、七月
 〇八月の夏期開催を希望している。

機関紙第二号冒頭に掲載された伏木田氏の「北方的表現主義の認識と出発」なる一文について、あまりに雑駁であり、その指摘するところの誤謬が、第三者へまちがった印象を与えていると考えられるので、ここに敢えて反駁したいと思う。

第一に、標題に掲げた「北方的表現主義」なる概念が、頗る曖昧である。これは、北方的表現主義なのか、それとも、北方的表現主義なのか、そのどちらとも、分明ではない。前者なら、ラテン的感覚主義への叛乱として生じたドイツ的精神主義とも捉えられるが、それに「北方的」と冠するのは妥当なものだろうか。また後者なら、それが主義と謳うほど明確な主張を持っているものかどうか。何ともつかみかねるのである。

第二に、その曖昧な北方的表現主義なる概念に立つ作家が「全道展会員会友の七〇%を占める」と断定「その非論理性、絵画空間の欠如、主情主義を、袋叩きに会いながら頑固に進めた」と言っている。一体誰が袋叩きにされ、誰が袋叩きにしたのか。文中「雁首を並べている」と甚だ野卑な言葉で名指しされた一人として、袋叩きにされた覚えもなく、そんなことがあってはならないと思うのだが、この文からは、残り三〇%の中にボスの存在が窺われなくもなく、少数支配が行なわれているとも推測されかねない。若しそれが事実なら、これは会の重大な問題とも考えられるので、その具体例を指摘すべきものと思う。

第三に、袋叩きに会いながらも、標題の主

義を頑固に進めた例として、ぼくを含め、五人の作家名が挙げられている。そして「彼等は北方的風土を創造の原点に置こうとする：地方主義の行き方である」と決めつけている。これは甚だしい偏見であり、独断ではないだろうか。どう考えても、名指しされた諸氏が地方主義とは、肯定しかねるのである。ましてぼくは、風土性というものを、作家

の存在に逃がれたい因果のからむ土壌とは捉えていても、それを創造の原点に据え、地方主義の旗を振ろうなどは毛頭考えていない。いや、軽薄な地方主義は、頭から否定しているつもりである。それをもって、地方主義と断定した根拠が、この文中では全く明らかにされていない。かえって、七月十日付道新夕刊に、本郷新氏がこの伏木田論文へ賛意を贈られ「伏木田君はあたりさわりなく、彼等の一群は歩いていくだろう」などと言っていたが」と前置きされ「北海道の美術が地方的風土主義や生活主義の世界を低迷している限り、今後の発展はおろか、芸術というものが求められている、自

ZEN第2号に掲載された

伏木田論文への反駁

鶴川五郎

我と世界の造型の統一への展望は、絶望的であることに早く気づかねばならない」と、その一群へ否定的見解を投げかけておられる。この伏木田論文が、名指しされた諸氏を初め、七〇%の作家の行き方に対して、そうした誤解を他に与えたということ、伏木田氏に重大な責任があるのではないかとぼくは思う。

第四に、この論文の結論なる認識として、「あまりにも自然発生的な結果として表現主義的な芸術……と論述し「そういうもののみが優遇されることの誤解を怖れる」とも言っている。しかし、全道展の作家七〇%を十把一からげにして「あまりにも自然発生的」と雑駁に括弧「非論理性、絵画空間を欠如し、主情主義を押し進め」やみくもに表現主義的になったとの断定は、とりやうで、酷い侮辱とも考えられなくはない。そうしたもののみが、一体どこで優遇されているというのか。

全道展の作家群は、少くともそのように慢然と制作しているとは思われない。おのそのそれなりの論理を持ち、自己の存在のぎりぎりの局面で、懸命に描いているものとぼくは信じる。まして、言うところの、非論理性、主情主義、地方主義なるものを、極力排除することを念頭に制作しているぼくは、この一文で全く逆に断定され、道画壇を絶望へ追いやるものと誤解されることは、甚だ心外であり、とってつけたようにヘーゲルをあげつらう伏木田氏のまやかし、その識見を、根底から疑わざるを得ないのである。

訂正

●ZEN第2号、及び第34回全道展図録に次の誤りがありました。慎んでお詫び申しあげ：のように訂正いたしました。

●ZEN第2号

編集委員一同

P1、北方的表現主義の認識と出発の文中、上段11行目7字目及び、中段8行目9字目と14行目12字目の地を北に訂正

●第34回全道展図録

P14、私の視覚の文中、中列10行目、説明ではない。右列13行目、色々の要素の絡み合いの中から、と訂正

P108、福井正治氏の文中、1行目、「形は古きを慕い」と訂正

P118、120、会員会友住所録中、谷口一芳 T063札幌市西区手稲西野4-9-2285

田中忠雄 T180 (03) T0424 (21) 0553

松島正幸 T165東京都中野区上鷺宮1-3-10

池田正之助 T011

大森亮三氏は、版画部会友と訂正 戸次正義 T041函館市赤川町15561と訂正

住所呼称変更と転居

山下脩馬 T057浦河郡浦河町常盤町公宅 T01462 (2) 2827
安藤佐智子 T040函館市人見町25-29
新国美津 T04229 (58) 553

4 岸葉子 T201に変更

第34回全道展作品評



〈絵画〉

やっと真夏の太陽が北の大地に訪れたかと思う間もなく、寸暇を惜みながら赤道に向け帰って行くのと同じように、全道展の会期もまたたくまに終りました。個々や全体共々にその収穫や問題をはらみつつも、皆さんは一種の安堵と反省が交差した日々であろうかと思ひます。今号は、入選者の一年間にわたる労に償うる全部までとはゆきませんが、今後の指針の一助になればと考え、会員諸氏による入選作品寸評を載せました。また、一步の力不足で選にもれた方々も、評は載せられませんが遠慮なく各々の会員の諸氏に評を申し出て下さるようお願いいたします。来夏には、また作品でお会いできることを切望しています。

〈絵画〉 獵場亮子「人間風景」、色彩を豊かに駆使した人物は、二つの塊りとしての確な表現である。ただ単なる表現にとどめず、更に人間ドラマとして追求していくと、必ずマチエールの問題にぶつかってくるでしょう。泉京子「辻芸人」、モノクロームの破たんのない仏像シリーズがすぐ頭に浮かぶのだが、あの思い切ったモチーフの扱いがこの画面にもほしかった。門馬よ字子「かじゆまる樹の下」、いつもながら、黒の扱いがみごとな手堅い作品である。点景となる白いやぎが印象深い。高橋靖子「静物A」奨励賞、気おおいなく描かれた黒っぽい画面と、赤いギターとの対比に、濃化された抒情をみる。武田忠子の「逝く日」、入念に描かれた人物のそれぞれに、作家の意図が伝わっている。背をむける裸女と、あどけない女の子が、もう一步鮮明な形ででてくると説得力が増すと思う。山田大乗「旅人の午後」、発想は、なかなか面白い。イメージを深めるために焦点を、雲なら雲にしぼってみてはどうだろうか。更に表面の光沢を少しおさえた方が、効果的ではなからうか。清田操「待合室C」、実に素直にキャンパスに向かう作家の姿勢がうかがえる。更に冒険を試みて、描く楽しさを味ってほしい。渡辺千香子「歩くB」、前は顔をアップに描いていたと思うが、面白いフォルムを持った作家だ。構成の意図はユニークだが色彩にもう一つ張りが欲しい。渡辺美智子「風景」新会友、フォービックで色彩

が鮮明だ。イメージをどうフォルムにおきかえていくか。今後を期待したい。吉田康子「公園」奨励賞、昨年比して色彩がまるやかになりつつある。今後の展開がたのしみだ。千葉幸子「シーソー」、心地よい風が吹きぬけるような、さわやかなタッチである。この筆力を大切に、もう一步緊密度がほしい。安木尚博「アンビバレンツ」、土井善範「家族B」奨励賞、ともに群像を扱っているが、フレッシュで活気のある画面構成である。更に人体のフォルムをさまざまに追求してほしい。砂田陽子「黒の構図B」奨励賞、マチエールが美し、背景となる黒の空間処理にこの人の造形の意図をみる。より大胆な試みを期待する。以上

〈評〉 嵐玲子

矢下瑛子「赤の静物」見るからにういうい感じの絵である。黄土と赭に配した緑や黒も美しく、水平垂直のてらいのない構図も素直にうけとれる。堀川勉「潮さい」全道展定連のこの作家はもっと実力のある人だとぼくは思っている。今回は少し迫力にとほしいうように感じられるが、坪野秀子「むれ新会友」色感筆触ともに力量を思わせる。自由奔放な自信に満ちた筆致、それに加えてもひとつ色彩の冴えが望ましい。岡田義己「人々」前面に立つ二人の顔も、窓々の顔もどれも疲れた悲しい顔だ。エメラルドと朱色が一層悲愴感を強める。宮崎むつ「ひとり憩う女」奨励賞、平塗りのようにいて不思議に量感のおしてくる作品だ。色調がより洗練されたらと思うが、小野司「白い海辺」何かどろどろした人間の生きざまのようなものの迫ってくる作品である。坐った群像の構成も巧妙である。佐藤公一「篠路」黒い画面に適当に白を置き、おさえの効いた色を適宜に配して農民の不安感を静かに訴えている。全面に置いた横流れの線が更に不安感をかもしだす。大泉康子「過ぎゆくもの」画面下部の棚に置いた布の模様、克明に描いた枯れた植物の線の動き、方形円形のあり所などが、全体に微妙に働きかける。伊藤勝美「失望」星条旗を日章旗の形に重ねて象徴するものは何であろうか。縦に重ねた人物の顔も、或は白く或は黒に消え失せる。ゆるぎのない画面構成である。脇坂裕子「木漏日」日本画を思わせる作風に空間を設定して平板に墮とさぬ工夫が施された。樹木の描写に稍こなれのわるい部分もあるが特異の作風である。武藤富子「人物」苦勞の跡はうかがえるが、残念ながら破綻が目につく、静物がとびだし、背景が人物から離れてくれない。もう一步の整理が望ましい。大橋弘子「想い」渋い色調で巧みに画面が組立てられている。手の表情を見せることにも成功した。ただ器用さに流れぬよう警告したい。外山ムツ「海辺の倉庫」奨励賞、こころの赴くまま一気に描上げたかにも見えるこの作品はまことに魅力的である。一見単色のよくな画面だが、細かに計算された色彩が潜んでいて一層魅力を増す、帯状の横鉢の黒も効果を強めた。佐々木信吉「赤いバラ」青味

緑と倍緒と白の対比の美しさ。暗く不安気に垂れ下った細ごま事物が描込まれているが、美しい色調だけが印象に残った。以上

〈評〉 一木万寿三 福井のぼら「人物」今迄の繊細な作品から、一転して力の入った筆勢で逞しい人物像を描き切つて一段の進歩が期待できるでしょう。安井夕子「明暗3」人体の追究に一筋の人。堅牢な画面、色調も良い誠実な作品、追究の焦点「明暗」の二人の空間関係が稀薄。野浪志津子「静物I」雑多な静物を無造作に描いているが全体が統一され描く楽しみが画面にリズムカルに表現されている。後藤叔子「人形と枯れなんぼん」素朴で優しい作品、人形の赤い靴が画面を締めている。筆致が細くなり過ぎないように。成田泰明「菩薩達」可愛らしい菩薩達を画面に厚く塗り込め、その構成、白黒の配分も良い赤が画面に変化を与えている。深瀬寛「DISCO」力量のある常連、今回は燈下の人物群を描いている。赤と黒の強烈な対比が怪しい夜の雰囲気表現している。長尾宇多子「静物C」女性らしい爽やかな作品。パラスルとオレンジの花の配り方が効果的、丁寧に画面を処理している。酒井俊行「室内の男女」透明感のある色彩は美しい。画面の男女の組合せと、腰かけている女に重量感が乏しい。大きな画面作りは賛成です。大平弥生「風景I」達者な筆使いで平凡な風景をリズムカルな作品としている。巧みに溺れて筆が、饒舌にならないように。

金沢実「静物Ⅲ」青の調子で絵をそつなくまとめ空間構成を狙っている。しかし独自の目を期待しませぬ。原田泰子「静物」情熱的に一杯楽器のある静物と取組んだが少し気持が潜行してデッサンが乱れたようです。加藤博「元町」函館の風景を描き続ける力量がある。今度の建物も骨格は確かだが、自然描写に重点が傾き絵に鮮度が欠けた。左右の建物も確実に描いた方が絵が強力になったでしょう。モノクロームでの作画は潜在的に沢山の色を持っていないと危険です。資質のある作家だけに今後を期待します。佐藤良紀「陰ける漁港5」画面が堅牢で石畳の質感、暗い港の感じが良く表現されていますが岸壁と船のデッサンが少し変でした。高橋永実子「風景B」北国の暗い風景を独創的に力強く表現していて面白い。作家の意図が素直に画面に塗込められている。

〔評〕鎌田俳捺子

寺原悟「冬の早朝」よくある漁港風景だが、構成に意をばらばら、静寂な早朝の気配が漂っている。林教司「青い壁」堅牢な壁を静とするならば、ほろりあげた卵を瞬間にとらえた動との対比がよく表現されていると思う。佐々木俊二「風景」働き疲れ病める人の痛めたらしい情景に、鳥の存在は不吉なイメージを暗示している。なおざりにできないことだ。工藤善蔵「祈りのある風景」人物配置の構成はよく、中景の横たわる人の表現が好ましい。坂本久子「追憶A」夕暮の海辺に遊んだ情景、子供の顔に親しみを感した。三浦正子「海の詩Ⅱ」浮玉、箱、コンクリートなど質感に神経をくばった表現に好感がもてた。清潔なイメージを發展させるため空の色に一考を要したい。沼田卓「湿地帯A」湿地帯の心象風景、青色を基調としてよくまとめ、詩情を表現しようとしている努力をかう。中丸茂平「最終楽園B」追憶のイメージがあつて楽しい作品である。この時代に戻つてすごしたい衝動にかられる。佐藤フサ子「並べた静物」簡素明快な構成もよく、静物も絵画的に表現されているのに好感がもてる。山口一子「静物の中の風景」帽子、トランクも生きいきと描けている詩情あるよい作品となつている。本田さち子「人形と崩されたモデルたち」棄てられる運命のこわれたモデルに愛惜の眼を、人形をかりて語ろうとする発想に共感。多田襄「青い部屋」きれいな色感が画面に配置されてすがすがしさが漂う、深みのないうらみがある。藤村正豪「かれい干す海辺」構成されたものひとつひとつを力強く描いているところにかくまひさがある。福井凱将「街の壁」遠景の街壁がよく出来ているが、近景処理にひと工夫して、美しさを表現してほしい。以上

〔評〕谷口一芳

深谷栄樹「浜風景Ⅱ」画面の構成や、部分的に面白い要素が眼についた。しかし全体的に表現が粗雑、荒さが気になる。今後に期待したい。小野寺伸司「階段」一応破綻なくまとまっているが、表現の効果やテクニクに一層の工夫がほしいと思う。燕ゆう子「室内Ⅰ」女性らしい甘美な絵で好感は

持てるが少々饒舌、散漫。もう少し簡潔にしてはどうか。特に画面左上部等、力強く訴える力も増すとと思う。滝川秀敏「藤椅子のある静物」個々のものを繊細によく表現している割には煩雑さがなくまとまっている。作者の意図は一応描かれたが訴える力がほしい。構図の点で椅子の位置、ランプ等が気になつた。浅川茂「廃物」構成がよくできていてマチエールも堅牢である。一見して以前からの地方的パターンの感じた作品。独自の工夫と扱いを考え類形的なものからの脱皮が必要。渡辺貞之「モーションA」北海道教育長賞。力作。赤の扱いが効果的。煩雑になりそうなのを整理し色彩的に生かされているが、背景や描写の中で適切な省略と思えないところが気になつた。渡辺通子「座る女」表現が非常に達者で力強く画面上部はよく描けているが下部に難を感じる。不安定な感じがするのは全体的な構成からと大腿部、椅子の扱い等からくるのだろうか。中西孝亘「静物」渋い色調の中に魅力のある作品。しかし暖味さもあつて気になる。厳しい緊張感の表出に一工夫を。田中ヨミヌ「煩勞」手慣れたテクニク、色数を極度におさえてよく追求しているねらいや主張ももう少し明確に、背景の茶色部分の処理やフクロウ、人物の表現に一工夫がほしい。二部静世「八月のある日」叙情的で女性らしい絵。しかし少女趣味的なものが弱さを感じさせる。もっと迫力や厳しさがほしい。木渚邦夫「仮眠のひととき」以前と画風が違って写生的描法、人物の頭部を意図的に省いたのだから異様に見える。空の広さやベンチ下の空間処理など構図で一工夫あれば一層効果的と思う。矢元政行「静物」全道展の中でも異色な作家。表現がユニークである。全体的な整理と作品としての質の向上を考えた。土屋千鶴子「牛と人間Ⅳ」思いついた色彩の扱い伸々した表現でヴァイタリティを感じる。大らかでよいが黒の扱いに抵抗を感じた今後を期待したい。森谷一「働く人B」新会友。常連作家で例年よく作品を見ているが達者さが逆に災いし弱々しい画面になつていることが多い。今回の作品は従来のパターンではあるが構成が面白いスナップ的なものから脱皮して絵画的表現の工夫で迫力のある作品を期待したい。以上

〔評〕久守昭嘉

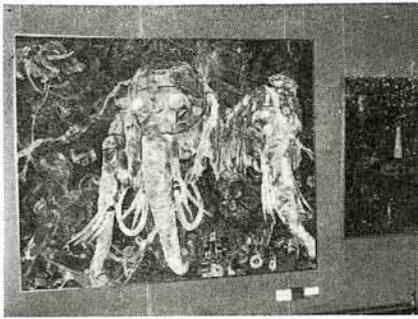
道添宗敬「I氏の時間」自分独特の世界を持つているのはよいと思う。発想を意欲的に強調するパッションも欲しい。今後を期待します。小林さと枝「赤の花」赤の花の主題に力が入っているのはよいが、花と空間と瓶との有機的な関連についてももう少し考えてまとめてほしい。棚橋永治「室内(Aトリエ)B」デッサン力のしっかりしている人だと思ふ。発想の段階で、自分のイメージをはっきりさせて、のびのびかいてほしい。中村静枝「蝶」蝶の作品から個性的な詩情を感じた。画面からうける心象をもっと強くする為にイメージと色の結びつきを更に考えてほしい。木村富秋「風」色調もすばらしく流動的なよい作品だと思ふ。頭部の表現がしっかりしている。

札幌時計台ギャラリー
 一洋画材料専門の店一
OAK画材
 札幌市中央区北1西3仲通
 TEL 261-8971

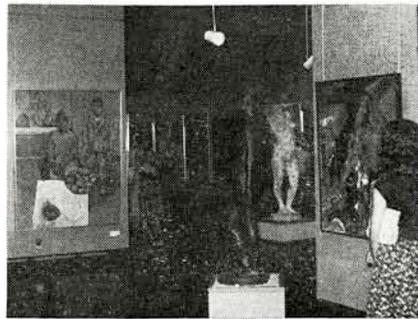
holbein アーチストピグメント
 (ホルベイン専門家用顔料)
 あなたの手で、油彩画、フレスコ画、テンペラ、日本画、水彩等の古典画法を再現できます。
 一詳しくは最寄りの画材店で一
ホルベイン工業株式会社
 北海道地区総代理店(札幌)布川

洋画材料
大丸藤井
セントラル
 札幌・南1西3

るだけに画面下半分にも一考が必要でないだろうか。鈴木敏春「牛骨のある静物Ⅲ」デッサンもしっかりしており、色調もよいと思うが、発想の中のイメージをもっと追求し深かみの作品を期待します。佐藤恵都子「女群」色調の美しさと人物表現のうまみを感じます。空間と人間と人間相互の有機的関連の面をもう少し掘り下げてほしい。藤井高志「次元Z」奨励賞 人間とその環境に人間臭さがあるが、上部の人間、空間の処理窓から牛雲Aが動的にみえる色面処理の美しさは若々しく、発想の面白さはよいが、牛の目の表現の説明的な面は弱さを与えていないか。中谷喜幸「静物A」画面構成の面白さがのびのびさせているが、物と物の有機的な関係に意図したもの表現できたら素晴らしいと思う。穂井田日出雲「いさばやI」新会友 例年の緊張がやさしい目によって弱くなり、独特な面がうすれた。画面構成で、まだ右半分がありそうな余韻が残った。渡辺嘉之「漁村C(舟小屋)」不漁の船小屋の詩情をイメージに例年見ているが、よく描ける人だと思ふ。もう少し詩情を強く表現し感動もほしいものだ。岡沼秀雄「触跡」新会友 色彩のハーモニイとユニークな構成の美しさはすばらしい。上部の空間の美しさとその処理について、触跡の意図の表現にマッチした空間処理に漢としたものを感じる。斎藤隆博「白日夢B」色にハーモニイがあり美しいが、白日夢のイメージがは



きりしている事と、もっと追求できる人だと思ふ。西辻恵三「とり」黒い鳥から色彩が豊富になった丈に表現力が弱まったようにみえるが、色調も美しく構成も考えている。今後を期待します。田丸公記「静物A」画面の力強さが若さであり、よいと思ふが、その反面粗雑さにつながらないように、イメージの追及に深みも考えてほしい。大嶋美樹絵「鳩のいるコンチエルト」女性的な色感とやさしさがあるが画面全体としての構成にもっとユニークさがあってほしい。岡田玲子「ファンタジーI」色調がファンタジーらしく美しい配色だと思ふが、花の表現に力強さをかんじる反面人物の表面が弱く、もっと空間もふくめて有機的な関連を更に深めてほしい。以上



〔評〕米谷哲夫 細井四治郎「流水」は点景のカラスや燈台が浮いているが、全体としてのびのびよく描かれている。山川清子「脱」は大きさがあ

るが、二人のうしろが穴になっていた。加納和美「廢船のある浜」逡巡した空はいいが、全体として筆が走りすぎ、流水は海の色も浮か、船も生氣を失っている。清水昌光「ひと隙」は窓の外は自然だが、室内が作り物になっている。畠中治知「静物Ⅱ」自分のものがもう一つ欲しい。絵の具との格闘をのぞむ。黒田邦裕「群像」は、光の部分がキャンチャだ。足の重さが救い。山崎邦子「廢船」船はガッチリ描いている様なのだが、空が弱いのは船のデッサンもちゃんとしてないということ。稲田和夫「骨のある静物」骨の他のモチーフが弱くバックも描き込み足りなかった。中島巖「時」中心の暗い部分はいいが明るい部分の色は浮いていた。友井勝章「月の案山子」はよく描きこんでいて今年の絵には牛の形も見え、地味だがじつくり自分の仕事をしている人だ。田崎謙一「普賢延命菩薩図」全道美術協会賞・田辺三重松賞 色或いは絵の具とのふれ合い、或いは葛

藤かのぞまれる。以上

〔評〕八木保次 艾沢祥子「アファヌーンⅢ」多くの生活自動車を通るであろうこの道路表現の不十分さがこの作品の持っている雰囲気弱めている。佐藤恵子「白い屋根」薄墨のゴマ刷りが生かされて雪景色に暖かさが感ぜられるがその中で生活感もほしい。宝賀寿子「雪どけ道」雪どけ道の表現の力強さが画面全体に満ちていたら一層の展開があるのでとは思ってならない。八木知子「飛ぶ虫」奨励賞 密度ある野草群の表現は心地よい風情の画面となっていて、その飛ぶ虫を通じて強く打つものがほしい。大川幸子「フーガ」色調の良さが取得だがたらしの形の甘さはこれからその形の厳しい積み重ねが必要と思ふ。和田裕子「テーブルの上の静物」室内テーブルの表現の素直さと弱さはこれからの作業の中で弱い密度も強くなることを望みます。木原武子「木」木をテーマに続けているこの作品も詩的さわやかさがありこのまま進めてほしいと期待される。菱和子「森へⅡ」森の日差しが暖かく感ぜられるが、刷り面の色彩の重さが気になる。上田寿雄「閉ざされた森」その銅板から刷り上げられた画面その引き込まれるシェールの世界はこれから先への展開を求めます。永井みよ子「レリーフのある鏡Ⅲ」面白いテーマから出てくる甘いムードは鏡の中の世界の展開をねちちこく進めるとそのトーンの弱さも無くなるように思う。以上

〔評〕大本 靖

印刷の美を、私達は考えます

中西印刷株式会社
札幌市東区東苗穂町505番地 ☎011(781)7501

三菱鉛筆

ぜんしんがデザイン 良心的な製品

株式会社 松山額縁店
札幌市狸小路5丁目 TEL(代)251-9000

木の瀬博美「或る日の記憶」彫り、摺り、色調は申し分ないが、左側の楕円(女性の胸)の描写が弱く不十分なため、訴えてくるものがあまいになり、かつ、画面の他の要素との関連性、必然性が稀薄になったのが惜しい。三神ひさこ「下着屋の広告」構図、白黒の配置は良いが、グロなものも美しく描きたい。毛髪や四肢の線の表現にもっと美しさを心がけ、線の太さやコントラストにもう一工夫を。三神恵爾「横向きの聖ロビラントス」独特な心象的な描写、大いに発展を期待する。今回の作品についていえば、両耳の樹と蝶の表現が弱く目だけが強調されたため、画全体の混然とした空気に欠けたのが残念だった。高倉郁子「舞いあがれ」奨励賞 構図、白黒の配分、細部描写は美しく成功しているが、一見、難民漂流の様にも見える人物の姿態、表情に表現の不足があり、又、舞い上る物の表現も不十分だったため、作者の意図や不鮮明になった。杉浦篤子「花の村から」構図、人物の表現はよい。花の描写にもう一段の工夫が欲しかった。花ひとつひとつをもっと緻密に、線を大切に、花ごとの明暗にも神経を配る必要を感じる。佐野敏夫「冬の終り」奨励賞 残雪、雪間の枯枝の表現美しく適切、前景に強い枯葉を描いて画面をまとめようとしているが枯葉が唐突になりがちである。枯枝や遠景の描写にも線の強い部分があつてほしい。画面全体の強弱の工夫にさらに一考を。北川佳枝「沈黙の町No.2」無難にととのった佳品と思う。それだけに訴えて

くるものが弱くなるので、コントラストを更に強めたり扉の木にも部分的に緻密な表現を入れてアクセントを持たせる必要を感じる。田口丞二「滞船(I)」大きな景を力強く表現してかなり成功した作品。欲をいうと同じ太さの白線による表現が多いのが気になるのと、波の表現をもう少し様式化し彫りの美しさも見せてはしなかった。原島典子「椅子の上の人形」女性らしい繊細な佳品。ただ材料が多く画面構成が弱くなってしまった。もっとアクセントをつけたら、地の白の美しさを充分生かした部分もあることが望まれた。佐藤武三「十勝(春)」落ちついた佳品である。樹林、新芽の柔らかなさの表現、遠景も成功と思うが、前景の農機具の表現が同じ太さの単調な黒線になってしまったのは残念。機具を表わす線にもっと神経を使ってはしかった。以上

〈彫刻〉

〈評〉 浅野武彦

田所陸男「母と子」テーマと構築性に魅力があると思います。しかし量を決定するふんざりが悪く、量が弱く見えます。三条美智子「Modern Dancer. M」素直な制作態度で好感が持てます。首の部分はデッサンも悪く、下部の処理も一考を要します。高木美智男「Wavention '79-7」やや表面のきれいな先行した感じと量の力強さに欠け、彫刻的な主張が弱まった感じですが。川田静子「今炭壘の中で」量の捉え方や表面の肌合いの表現に独自の彫刻的な感覚を持っていると思います。しかし全体としてみると量の統一感や緊張感に少し欠けているのが惜しい。高木順子「おんな」やや作り過ぎた感じで、調子が一樣になり過ぎました。花田正雄「彫刻(木彫) 神祭」繰返しの形体がやや単調。単純な力強さはありませんが、正面のデコラは量を損っているように思いますが。小野健寿「潮のかけり」手慣れた巧みさはあるようですが、モチーフの説得力が弱いという審査員諸氏大方の意見でした。遠藤芳光「黒のフォルム」フォルムの力強さを持っていますが、黒の着色のし方は良いとは思えません。池田護女の首「石彫」ですが、まとも過ぎる感じ、テクニクは手慣れている感じですが、まとも過ぎる感じが、生気が乏しい。河野修一「立像」大変素直な街のよい感覚で人体が表現されています。田中康彦「トルソ」北海道知事賞 生真面目な追求力が迷いなくつらぬかれていて、見るものに爽快な感じを与えます。今後の制作に期待します。

田辺美知子「のんちゃん」仕上げようという意識が先行して形が観念的になった。土谷敬「座る女」敵しい量の扱いで、まともも良い。人体の持つ生命感の表出を望む。川端篤子「首男」顔の表情と量の強さがとけ合って良い効果を生んだ。表面の処理は良い感じといえず一考を要します。本間清子「A」頭頂の切りおすと、ある効果が出ました。顔面下部が良い。堀悦「座るII」総じてデッサン不足のようです。真面目なねばり強い制作態度は良い。増田邦博「トルソ」基本的なフォルムの把握が弱い。感覚のういういしさを取り得でしょう。中田千年「風を待つ」概して観念的である事が細部にとらわれない大らかさを生んだようですが、頭部・胴・足等の有機的なつながりに欠けています。以上

〈評〉 神田比呂子

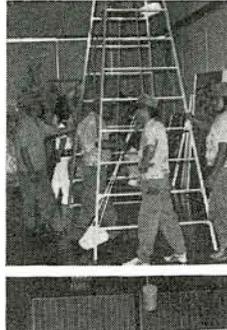
嶋守哲夫「風」奨励賞 エジプトのスフィンクスを思わせるが、しりの骨格を持ち、素材の良さをひき出し重量感溢れたものである。佐藤麗子「木彫 Part 3」奨励賞 生の人体にこだわらず自分の中で消化し、全体の塊りとしてまとめられていて熱っぽく迫力がある。田中隆行「あさ」荒々しい肉付けと力強いデフォルムが作者の感動を強く語りかけ効果的である。川辺由紀「座すII」しっかりした構成で情感豊かに表現されていて重量感もある。佐藤雄二「木彫」荒削りながらしっかりとした骨組みで量感もありよくまとまっている。佐藤雅幸「無限VI」木の温かさ、優しさを丸味を帯びた肉付けで効果的にひき出した意欲あふれる作品。佐藤公毅「立女B」迫力にしっかりと目を据え、動きを抑えたポーズがより強い情感を漂わしている。森戸春樹「とんがり帽子」小立像ながらしっかりと構築性を持っている。上埜雅路「リベカ」繊細で豊かな感性を持った作者の熱情が伝わる首である。福岡陽子「首II」地味ながらもじめな作品。斎藤祐子「ひろこ」女性らしい優しさの溢れた作品でほのぼのとした情感を漂わしている。山下二美子「K子の首」頭部全体の構成にがっちりとした骨格の強さを感じさせ力強い。小山登

子「夏」構成と細部にこだわらない肉付けで難しいポーズをよくまとめている。安定感もある。二部昌見「ネコ」猫を彫刻的に、動的な構成で力感がある。重吉克隆「海坊主」強い自我意識による自由奔放な構成で異様な迫力に溢れた作品。村田方「Hanging」新しい情況彫刻への一つの方向を感じさせ、次の追求と展開が期待される。黒田栄一「石頭(象)」北海道新聞社賞・新会友 今年話題を呼んだ力感溢れた作品、静かな情感と圧倒的の重量感、面にも張りがあり、堅牢な構成で、確かな、手応えを感じた。藤沢紀世安「モニメント」大づかみな量感がつとりとまとまっています。以上

〈工芸〉

寺岡和子「夏祭り」奨励賞 力作である。前提としての生活空間を大きく捉え、光源の扱い方によって創り出される色彩効果を計算した配色は、いかにも女性の実生活から生まれた作品である。今後、楽しみを越えた作品を期待したい。岩山テルコ「初春(ローケツ)」奨励賞 着物地という条件を積極的に活かした佳作である。ローケツの自由性をもっと多様化して、着物をはなれた作品を期待したい。大豆生田博子「フォルムII」ローブワークは、扱いの自由性を活かしてこそ作品である。伸びるフォルムが欲しい。宮原ミユキ「スペースオブジェ」初歩的な形体の扱いから進んで、生活空間を意識した作品を期待する。木下朱美「緋想」織の大きな要素であるテクスチャを、もっと多様化

して処理すれば良かったと考え
る。伊藤啓子「タ立(タビストリ
ー)」積極的なロップワークとし
て観た。技巧に感わず造形化する
研究を希望する。田中和子「衝立
(樹間)」素直にまとめたローケッ
作品である。用途性をもっと拡大
した作品を期待する。七戸久子
「対話」素朴な作品である。工芸
の基本を感じさせる。岩村薫子「木
綿帯」実生活から生まれた作品
である。根井幸子「型染帯」型染
の単調さを上手に処理した作品で
ある。八島勝代「手描き友禅糸目
糊の線描き」労作である。野崎南



意見・質問・感想・ETC

●「ZEN」先生方と面識もなく、展
覧会場でお話を伺う機会に恵まれぬ私
にとって、機関紙の上で諸先生の言葉に
触れることができてということはとても
大きな励みになります。写真も豊富に盛
り込まれており、大変よいと思います。
「図録」初入手にもかわらず写真を載
せていただけに感激しました。入選
作品の全てを図録に載せる公展展は少な
いと思います。小さなスペースでもかま
いませんから続けてほしいと思います。
●「全道展」出品料が高すぎないところが
よいと思います。札幌・大嶋美術絵
●制作活動は、自己闘争という感じで
それを通して自分を見ていくみたいなの
ころがあります。他のかたが一生懸命や
っている。自分も一生懸命やっている
。展覧会という場合は、常に変動してい



風子「大地」織の傾向を示す作
品として取り上げた。今後、一層
のデザイン研究を期待する。庄司
光江「壁掛アジサイII」染の自由
性を活かした佳作である。今後の
住空間に対応したデザインと壁体
を配慮した作品を期待したい。藤
枝勝雄「木漏陽」札幌市教育長賞
の透き間から、やわらかな光芒を
放ち、心よくまとめあげた作品で
ある。細部に作者のゆきとどいた
神経が伺える。阿部憲司「夏のは
じめに」木材の異なる二つの素地
を上手に組み合わせ、素朴な中に

も金属の輝きがある種の雰囲気
醸し出している。橋本紀勝「幻境」
鍛造の技法を多様に使ってまとめ
あげた作品である。立川岩治「斜
縦合木木壺」異なる二つの木目
を生かし、材料の扱い方もいい
のである。阿部二郎「時の流れに」
方体から徐々に変化しとゆるる形
態の中に時間の推移とユーモラス
さを感じる。中秋勝広「湖上に咲
く」素材感をじょうずに生かした
作品である。特に、中心部が全体
を力強く引き締めている。奥谷扶
美子「透影」単純なフォルムの中
に、鎧の効果を巧みに生かした作

品である。武田文彦「遊への道III」
左右に広がる直線的な動きの中
に、大胆さと大らかさを感じる。
花差しとしても効果的である。
以上
●「評」折原久左衛門(佐藤清)
井上好子「器」量感あり、全体
のゆがみが気になる。塩入稔「鉄
釉透花器」かたじけなく、色調とも
いい。しかし美術展の作品として
どうか。金子章「萌芽」佳品。大
きな作品がほしい。安達吉男「自
然釉角壺」よくまとまっている。色
不足。秋田清陶「郷」フォルム色
調ともに良いが迫力がほしい。跡
部まり子「遊雪」佳品。色調に深

みがほしい。羽生田洋子「灰釉花
瓶」力ある作家であるがすべて単
調、一工夫してほしい。横田恵子
「作品A」造型にもたつきが目立
つ色も灰釉より脱けだせないもの
か。矢島千穂「壺(II)」ロクロ
成型ならまだ美しいフォルムがあ
るはず。今後に期待する。磯貝登
調がほしい。井田享二「作灰釉筒
花入」大作だが散漫。伊藤紀久子
「白い箱」良い作品だがフォルム
をもう少し整理してほしい。矢野
博子「鉄釉器」初出品だがよくま
とめている。以上
●「評」高橋武志

消息

●「今月に入って東京で蛭子善悦、神
田一明、瀬戸英樹会員の個展が相ついで
開催され、久しぶりに各会員に会いまし
た。もっと大勢の会員、会友、一開出品
の方が東京で個展、グループ展を開設し
たいと思います。」東京 菅野充造
●「市立小樽美術館、市民ギャラリー
開設(8月)色内、日銀小樽支店向い
●「10月1日より6日まで、東京銀座
資生堂ギャラリーの個展の為、眼をま
ずかしき、今年は1月に東京吉祥寺東急
デパート、12月の札幌時計台ギヤラリ
と計3回の個展、塾や美術学校や家内の

四カ月の入院と随分忙しい日々であつた
家内もどうやらよくなったので来年は少
々のんびりしたい。9月上旬の時、飛行
機で砂田友治会員と偶然一緒になると、日
大の医師の診断を受けに行くこと、日
ご快癒を祈ります。」札幌 原 義行
●高野次郎会長、七月、脾胃腸全摘出
病院消化器センター、目下自宅療養中です。
●第10回記念古平美術協会展を10月21
日、23日、古平町文化会館で開催、Z.E.N
関係では、西辻恵三、渡辺嘉之、穂井
田が出品予定。古平、穂井田日出発。
●「昨年9月から病名の分らない病い
におそわれた。歩いた病院の数が数なら
線り返し検査で取った血や、レントゲン
の量も相当なもの。あまり例がないよう
だ。骨と皮になった体にまだ食物が入ら
ない。これだけかくのは大変な勇気がい
る。全道展の諸兄、元気でやって下さい
(これから東京の病院へ) 9月12日」

●「昭和51年の春以来、登別市に居を
構えました。貝になりた、目下の所
そんな心境です。それでも、心は閉鎖的
になつたわけではなく、何とか脱皮した
いと悩んでいるところです。次回また作
品を見ていただきます。登別・諏訪英雄
ため 伊藤聡会友、一年間スペイン留学の
ため 9月30日出発。
●「この11月27日で満76歳になりました
。多くの友人、知人を見送って来まし
たが幸いまだ健康で仕事をできますが
眼が疲れやすくなりました。
12月、大阪日動画廊で個展の予定です。
札幌でも思っています。来年東京での
心づもりがあるのでその後になりますね
田辺三重松君の画集が日動画廊出版部か
ら出る予定ですが、今年の命日には間に
合いそうもありません。」東京 田中忠雄

●「先日、函館市赴き、久し振りで巴
里から帰国された蛭子善悦氏と懇談して
きました。昔小牧の画材店の一つがなく
なり、苦美堂一つだけになりましたが遠
隔地でも配達してくれるので便利です。
個展来年3月苦美小牧画廊、9月札幌時計
台で実施の予定。厚真・福井正治
●「今年1月、ローマ、パリの旅に行
つてきた。冬のパリ、樹間から見る風景
は素晴らしい。夜明けの遅いのに
驚いた。朝5時に目が覚め、ホテルの窓
から空をニラんでいたが、8時頃に明る
くなってきた。食事の時間や見物できる
行動展で東京の途中、連絡船で」
空爾・浅山咲知
●「機関紙ZENはいつも待ち遠しく
拝見しています。この頃いつも思うこと
それはよい作品というものは、ひとつの
大きな眼を持っている、ということを読
んだことがあります。こちらが作品を鑑
賞しているなどと言うものではなくて逆
に作品の方が見据えられているという
こと感動から来るものでしょう。4年

個展案内

- 渡会純 价個展 札幌パークホテルギャラリー 10月2日(火)～8日(月)
- 網走展 網走市立美術館 10月13日(水)～18日(木) <10/13・14銅版画講習会>
- 女満別展 女満別町民会館 10月20日(土)～22日(月)
- 堀内忠男 個展 東京銀座文芸春秋画廊 10月15日(月)～20日(土)
- 大本 靖 個展 旭川市⑨デパート 11月15日(月)～20日(土)
- 徳丸 滋 個展 時計台ギャラリー(B) 11月5日(月)～10日(土)
- 野本 醇 個展 時計台ギャラリー(A) 11月5日(月)～10日(土)
- 長谷川 忠男 個展 時計台ギャラリー 11月26日(月)～12月1日(土)
- 木村訓文 個展 函館いし画廊 11月22日(木)～27日(火)
- 本田明二 個展 第1会場 大丸セントラル画廊 第2会場 エルム画廊 12月4日(火)～9日(日)
- 東京展 東京日本橋高島屋 1月24日(木)～29日(火)
- 戸次正義 個展 函館いし画廊 12月6日(木)～11日(火)
- 原 義行 個展 時計台ギャラリー 12月10日(月)～15日(土)
- 北川 豊 個展 東京銀座文芸春秋画廊 1月7日(月)～12日(土)
- 佐久間 恭子 個展 室蘭日進堂 3月予定
- 岸本裕男 個展 東京資生堂ギャラリー 3月24日(月)～29日(土)
- 谷口一芳 個展 時計台ギャラリー 3月31日(月)～5日(土)
- 千葉七郎 版画展 時計台ギャラリー 5月26日(月)～31日(土)

道立近代美術館案内

- 第11回東京国際版画ビエンナーレ展 10月6日(土)～28日(日)
- 第54回道展 11月3日(土)～18日(日)
- 蛸崎波響展 11月3日(土)～23日(金)
- 第34回行動美術札幌展 12月8日(土)～16日(日)
- 子どもと親の美術館 1月5日(土)～2月10日(日)
- 第10回北海道教職員美術展 1月5日(土)～13日(日)
- 第3回北海道現代美術展 1月19日(土)～2月10日(日)
- 現代美術選抜展(文化庁) 2月17日(日)～3月2日(日)
- 北海道ビエンナーレ展 3月6日(木)～16日(日)

程前、竹橋の近代美術館で見たタマヨの大きな眼は、いまだに僕の心をゆさぶりに続けている。来る日も来る日もキャンパスに向かうこの頃、自分は果して何なのかを考える時、それは限りなく続く歩みなのでしよう。 札幌・波部重夫 ● 松島正幸 会員、フランス、カンヌ滞在中

● 田辺謙輔 会員、7月上旬から10月上旬までメキシコ滞在中

● 「いつの間にか老人になってしまいました。どうやら健康で絵をかくては、来年こそは良い絵を」とがなばるのですが、出来たものはだめな絵ばかりの連続です。又、来年もがんばります。 両眉・天野宮蔵

● 「久しぶりに受賞式と懇親会に出席した。野本、山口、伏木田、後藤など懐しい仲間が健在に嬉しかった。薄野での二次会は椅子に座りきれない者たちのために通路にごさ敷き、足のふみ場もない中で、語り、飲み、熱気が高揚した。結局、夜風に酔顔をさらされたのは午前二時頃であったか……。それにしても、懇親会ですまじまじは相当なもので、懇親会での限り、全道展はまだ健在なものなのだろうと思っただ次郎。 千葉・渡辺真利

● 「8月アトリエ増築完成、念願かない、高い天井の下で描けるようになりました。当別市は、昨年に続き移動展を開催しますが、文化施設が貧困で会場作りは地区出品者の努力奉仕、パネル作りが率先して汗を流しますが、地方の熱意を汲んで下さい。探光も直射日光あり、絵を飾るには相応しくないのですが、

市民の絶大な評判なので……、今年も又頭張ることでしょう。登別・佐久間恭子 ● 浦河町に引越してきます。引越しの日一般出品者の清水昌光さんが訪ねて来たのには感激しました。浦河・山下脩馬 ● 「アトリエ新築決定、中旬より着工。炭礦町の将来性のない町の山の中に人は言うが、人気のないこの山が好きである。家のまわりは鬱蒼という言葉がピッタシ、雑草も家の回りを攻める。これと冬の車の入れない道を歩かすれば、アトリエに最適なと思う事にします。という事で来年の全道展にはいい作品が発表できるかも……個展も……

● 「何を視るか」 解答のない一つの質問がこだまの様に私をつかんで離さない。ひたすら内的なる深みの中へ、歩を進めるより仕方ないことであろう。それにしても、私に眼はあることだろうか。 札幌・米沢邦子

● 「10月15日から大同ギャラリー1での全道展札幌会友展の打合せが9月5日道新事業局会議室でありました。出品者は12名と小人数ですが、皆さんはじめての会友展なので大作、力作を2・3点陳列の意気盛んで。札幌・他田正之助 ● 「病気が来くづづと日をつなぎ、秋風と共にいます。かた元気をとりもたした感があります。会並びに会員諸兄より暖い御見舞状を賜り感謝しております。 東京・本郷 新

● 「今春のスケッチから、札幌・小れん 新花」をやっと彫り上げ、久々の連休に同じく春のスケッチから、みずばししようの小品にとりかかりました。月並な対象を作品にする難しさを味わっております。 若小牧・浅野武彦 ● 「10月15日(日)開演80周年を記念して全道展移動展、立派な展覧会場になりました。観覧者の中には札幌でもみた方がみないという、会員の作品の中に札幌のみならず、いろいろな話が出て事情のわからない私は何とも言えませんが、田舎町の移動展なので軽く見られたのが残念でなりません。全道展の図録を見ながら観覧したい方は「いもちがう」この作品もまた「わ」この機会が空しく聞きました。 歌志内・森谷一 ● 「北海道や江別市の仕事を長く忙が、現在おそれらの仕事にかかり多忙です。又、教育界、労働界のことも無関係ではおられません。今年は選挙の年これらは特に関係あり忙しく過しています。 江別・諏訪田勝衛 ● 「しばらく八木共々札幌に落ちついておりまして、大東で展覧会なさる方のご案内預ければ「千早町宛て結構です」ありがたいです。札幌・ふ木伸子 ● 「青空が広がって、散策にふさわしい季節というのに、アトリエに暮らして追ってきた個展の制作に明け暮れています。宇宙人、死の精、魔術師と人はさまざまなことをご想像してください。こころのこころが、自然のふところ、秋を満喫したい気持ちかられます。 札幌・風 玲子

● 「本郷新さんのご病気のことはすでにご存知と思いますが、手術後肝炎でお苦しみの方です。早くお元気になられますよう祈っております。

● 「十一月、札幌時計台ギャラリーで個展です。目下制作中ですが、札幌原研さんと同行して中国旅行で得た強烈なイメージが絵になってくれず苦戦中ですが身近な風景が中心の発表になると思っております。 伊達・野本 醇 ● 銅路に「花井画廊」オープン。当分常設画廊として中央作家を含め作品の販売を手がけるほか、企画展、個展とすめるもよいです。店主花井雄氏は根づからの美術好きで、美術界には知人も多い。場所は、銅路市松浦町1-8、T0154(24) 5879。銅路・斎藤一明 ● 「先日、守歌をみて何十年前から自分で撮った風景のポスターを整理してみたが、ゴチャゴチャと入り交った何百枚の集積を見て我々にアキレ、そして懐しさがかみ上げて来た。国内は本州、四国、九州、北は樺太(旧名)南は朝鮮、満州の果て、チチハルをそしてハワイ、又はアフガン等々、観光旅行ならず、男同様の姿で絵の道具他にリュウの支度、又弁当や食しんぼううたの故に飲物やお菓子つとめ込んで、喜び或は悲しくて歩き旅、いくつかつづいたため整理しなければと、思いいつつ忘備のため撮ったポスターは全然と未整理のままである。何もなかつたあの時代をみんなと同じく歩みつけて来たのに、私の絵は一向に成果を上げていない。もうこんな歩みに足にならなくて、全く全道展の人々に癒してもらったと言っても過言でない大切な大切な足跡をみて、まだまだと力んでみるけれど昔の様に歩けなくとも心の中で歩き続けたいと思うのです。」札幌・西村貴久子

お知らせ

● 第33回、第34回全道展図録ご希望の方には、送料協会の負担でお送りします。申し込みは全道展事務局(063札幌市西区発寒4条5丁目434)8 竹内豊方)まで、第33回展700円、第34回展1000円。

● 出品者で住所変更のあったときは速やかに事務局まで連絡ください。

● 全道展企画「全道展札幌会友展」は10月15日(月)～20日(土)、札幌市中央区北3西3大同ギャラリー1で

● 9月7日の拡大事務委員会では全道美術協会の新会務委員が次のように決定しました。風玲子、尾崎士郎、斎藤洪一、坂口清一、竹内豊、堀内忠男、長谷川忠男、伏木田光夫、本田明二、山口惣市、渡会純の十一名。

募集

● 全道展機関紙「ZEN」は年二回刊行の予定ですが、全道展および「ZEN」に対するご意見、ご要望、ご質問、ご感想など、みなさまからの声をお待ちしております。連絡および送付先は全道展事務局まで。

● 全道展に関するお問い合わせは次のところへ

- 全道展事務局/063札幌市西区発寒4条5丁目434
- 竹内豊方、T011(851)9181
- 内232、(夜間・休日)(614)0673
- 北海道新聞社事務局文化庁全道展係/060(91)札幌市中央区大通西3、T011(221)2111
- 会員、会友で会費未納の方は早急に郵便振替口座、小樽8617、渡会純价全道美術協会宛。